

## 図書館への誘い（いざな）い ～『回転本屋さん』の开店～

愛知県立東海南高等学校 今泉 晶博

### 1 本校図書館の実情

#### (1) 東海南高等学校の概要

本校は、東海市南部の丘陵地帯に位置する普通科高等学校である。卒業生の 90%以上が大学に進学し、名鉄河和線の沿線にあり、知多半島の市町村から通学する生徒がほとんどである。近年、校舎周辺には新しく住宅地が増えたものの、市街地からはやや離れており、豊かな自然に囲まれた、落ち着いた環境の下で、生徒たちは学習や部活動に励んでいる。

卒業生には、「土の中の子供」で、第133回芥川賞を受賞した中村文則がおり、本校図書館にも「中村文則コーナー」があって、受賞当時の新聞や著書を紹介している。



#### (2) 図書館の利用状況

図書館は、大学進学を志す3年生が自習のために使う部屋としてふだんから開放されており、図書館を訪れる生徒の数は決して少なくない。

しかし、図書館の利用数に反して、図書の出数は少なく、直近では  
5月→57冊 6月→45冊（全校で）  
という数字が並んでいる。

また、教室棟から図書館へのアクセスがやや悪く、生徒たちにとって図書館があまり身近な存在になっていないという実情があった。（この件に関しては、それまで閉鎖されていた屋根のない3Fの渡り廊下をふだんから開放することによって、かなり改善された。図書館は本館3Fにある）

#### (3) これまでの活動状況

このような状況を受けて、本年度の学校評価の重点目標には、ついに「生徒の読書活動の推進」という文言を掲げることとなった。

今まで図書館では

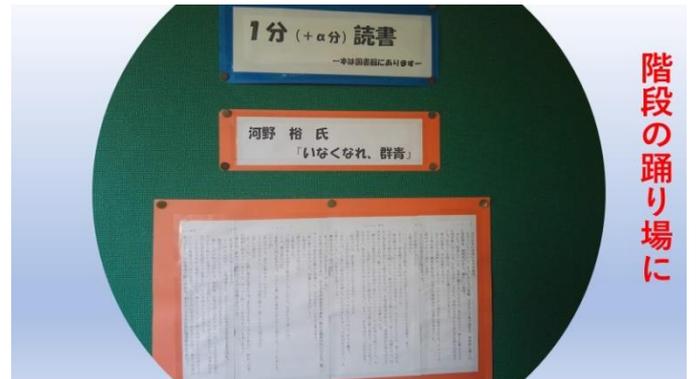
- ・4月当初の新生生に対する図書館利用のオリエンテーション
- ・「図書館だより」の発行（2ヶ月に1度ほど。新刊図書の紹介が主）



- ・図書室内の展示の充実
- ・「1分間読書」コーナー（教室棟階段踊り場に展示。1ヶ月ごとに入替）
- ・図書委員を中心に、貸出の啓発などを行ってきたが、なかなか貸出数の増加にはつながっていない。

#### (4) 図書委員会の活用

本校の図書委員の主な活動の一つに「購入希望図書を各クラスで募る（年2回）」というものがある。そして、このような活動に加えて、1、2年生の図書委員には「最低1冊は本を借りてほしい」と呼びかけている。「図書館だより」では新規購入図書の紹介も積極的に行っており、図書館からの情報発信が決して低調なわけではない。



階段の踊り場に

## 2 「回転本屋さん」の企画

### (1) まずは本を手にとってもらう

**悩める司書と図書部（情報研修部）主任**

- ・ 図書館は3年生の自習室となっており（進路指導部と学年の希望）生徒は多く来館するものの、1、2年生は入りづらい
- ・ 予備教室が少なく、会議・行事・検査の部屋としてよく使われる。
- ・ 教室からのアクセスが悪い

そこで本校では数年前から「回転本屋さん」という活動を実施している。

これは、本校司書の発案であり、大阪府河内長野市の清教学園の片岡則夫先生の「新書回転ずし」という企画がきっかけとなった。

当初はL Tの時間を利用して、図書館に一クラス40人の生徒を集め、各テーブルに10冊の本をカゴに入れ、5分ほど好きな本を選び、時間が来たらそのカゴを次のテーブルに回す、という方法をとっていた。

しかし、コロナ対策により、昨年「各テーブルに10冊の本を並べ、自由に読んでもらい、5分後に次のテーブルに移動する」という方式に切り換えた。結果的には200冊の本が図書館のテーブルに並ぶ、ということになり、ビジュアル的にも圧巻で、生徒の興味をひきつけるには十分であった。

5分間隔でテーブルを移動すると、一班あたり5～6回ほど読書する時間をとることができる。もちろん読む本は1冊とは限らず、複数の本を読んでみることも可能である。

## (2) 企画のねらい

本を手にとることへの抵抗感をなくしたい、ということが、企画者である司書の最大のねらいであった。

「最近の高校生は本を読まない」「読書量の低下」という声をよく聞くが、果たしてそれは本当だろうか。筆者の実感からすると、決してそんなことはない。

「最近の高校生は～」という批判は、少なくとも40年以上前にも言われていたことと全く同じであり、かつての高校生（つまり筆者）たちが、そんなに多くの本を読んでいたわけではない。現在においても、読書を趣味とする高校生の実数はそれほど大きく変わらず、図書館に顔を出さなくとも、自分で本を買って読んだりする生徒も多く、図書館の貸出数が、そのままその学校の生徒の読書量に反映するとは限らない。

また、学校の図書館では背表紙が色やけしたり、ページが劣化したりした書籍も多く、そのような「古びた」本は、そもそも生徒が手に取らない。そして、表紙のデザインやレイアウトは、生徒の読書意欲に直結する。「まず本を手にとってもらう」ためには、本の外見と鮮度が大切なようである。

（もっとも、学校の図書館の機能としては、新刊本を次々と購入するだけでなく、生徒たちが資料として活用できる書籍をそろえることも大切である）

## (3) 前日までの準備

生徒に読ませる200冊の本をセレクトする、という作業をまず行う。新刊図書や人気の本、話題となっている本を中心に選んでいくのだが、各テーブルに並ぶ本が同じような傾向では生徒も飽きてしまうので、例えば小説→スポーツ→日本史→自然科学といったように、テーブルごとにテーマを設定して、移動するとさまざまな分野の本を読むことができる、という工夫をした。

どのような本を選ぶか、という視点は、司書の力量が発揮される場所であり、普段のリサーチによるところが大きい。しかしいざ選ぶとなると「これも読ませたい、あれも読ませたい」と考えるものであり、実際には200冊をはるかに超える本の中から厳選して図書を選ぶことになる。



## (4) 生徒に本を評価してもらう

各テーブルに「読書メーター」というプリントを一枚貼り付け、そこには10冊のタイトルが書かれているが「良さそうと思った本」にシールを貼る、という作業を生徒にお願いした。もちろんこれは任意であるが、前のテーブルから移ってきた生徒にとっては一つの指針となり、また終了後にはどの本が多く読

## 自然科学・スポーツ編



404	感じる科学	シ
408	調理バズル「出しゃこ問題」傑作選	
410	数学ガール	
411	ips 加藤・三村先生	
70	美しい小さな雑草の花図鑑	
0	へんないきもの	
	華やかな数、複雑な「私」	
	美しい人体図鑑	
	スポーツで動く	
	Number (スポーツ雑誌)	

まれ、興味を持たれたか、という結果がわかるので、図書館にとっても有意義な情報となる。

また、この後、実際に本を借りようとする場合に参考することもできる。自分が時間内に手に取ることができなかった本でも「読書メーター」や友人の評価をもとに、読みたい本を選ぶことも可能である。

## 小説①

### (5) 本を借り出す時間をとる

最後に「読んでみようと思った本は自由に借りてください」とアナウンスする。本館の利用規程では貸出期間は1週間、一度に2冊までとなっているが「回転本屋さん」の企画を、夏休みや冬休みの直前に行うことにより、本を借りやすくする工夫をしている。



## 生物学その他



「回転本屋さん」の後に、生徒たちに何かの活動を強制（感想・アンケートの類）することは、かえって本嫌いの生徒を増やすことになるのではないかと、という懸念からそのようなことは一切行わない。

## 3 活動例

### (1) 対象クラスはまず1年生

実際の活動例を紹介してみよう。

昨年度の2学期期末考査終了後の「国語総合」の授業時間内に行った活動である。1年生（40人）のクラスで行った。図書館を利用したことのある生徒は2名で、これまで図書館に来たことがない生徒が大半である。



## 歴史・エッセイ

### (2) 200冊の本をセレクト

準備の都合上、1時間目に実施することは不可能なので、2時間目の授業中に行った。前述のように、テーブルごとにテーマを決め、移動していくたびに、前のテーブルとは違う分野の本を読めるように工夫した。



2分ほどガイダンスをした後にさっそく開始した。始まってみると、生徒たちはそれほど飽きることもなく集中して読んでいる。

5分ほどしたら、オルゴールの音色を流し、それを合図に隣のテーブルに移動する。生徒たちの間には会話も生まれる。

### (3) 司書も驚きの結果に

当日は45分授業であったため、5回転したところで終了。希望者には貸出手続きをとり、残りの生徒は自由に図書館内を見て回った。

授業終了時に本を借りていった生徒は17人。冊数は25冊という結果であった。これまでの活動で最も多い数字であり、企画した司書も驚いていた。

生徒の声は「借りるのこんなに簡単なんだ」「この続きも借りていきます」「こんな本あるんだー」といったものであった。



### (4) 司書の所見

「今回は冬休みの直前だったので、タイミングもよく、本が借りやすかったのではないかな」

「実施時期と本の選定は大事なので、生徒の『読みたくなる』時をうまくとらえてこれからも実施していきたい」

「新刊本の購入時期（年2回）に合わせてこの企画を行いたい」

令和2年度12月 図書月間貸出表

クラス別貸出数(単位:冊)

11R	12R	13R	14R	15R	16R	17R	18R
0	19	4	1	2	3	32	2
21R	22R	23R	24R	25R	26R	27R	28R
14	2	1	0	2	0	0	6
31R	32R	33R	34R	35R	36R	37R	38R
5	0	17	17	0	0	28	6

学年別統計(単位:冊)

元年度	2年度
1年	32
2年	54
3年	15
1年	63
2年	25
3年	73

図書貸出利用人数  
(自習は含まない)

学年	貸出人数
1年	42
2年	15
3年	49

### (5) それ以後の状況

貸出数は目立って増加してはいない。ただ、司書によると「今まで1人だけで来館していたもとの読書好きな生徒が、友人と来館する回数が増えた。彼女がおススメして、友だちや先輩が借りていく、という光景はなんだかとてもほのぼのとしています」とのことであった。

#### 4 まとめ

今回の企画の目的は、司書いわく「図書館を特別な空間ではなく、日常的な風景にしてくれたら、うれしいです」ということにある。

高校生にとって、学校図書館とはどのような存在なのであろうか。昨今の生徒たちにとっては「書店で本を買う」ということが、それほど日常的な行為となっていない。漫画もよく読むが、それはコミックスや週刊漫画誌を購入するのではなく、ネットを通じてスマホの画面で読む、というスタイルが定着しつつあるようだ。

また、市販の電子辞書はコンテンツの種類も豊富で、かつ軽量でもあり、書籍媒体としての辞書を活用する機会もかなり減っている。インターネットの普及により、かつての百科事典の類はその役割を完全にウェブ上のサイトや検索エンジンに奪われている。そして、何よりインターネットは24時間のアクセスが可能であり、わざわざ図書館に足を運ばなくても調べられることはいくらかでもある。このような状況は少なくとも20年前には考えられなかったことであり、我々は以前よりも遙かに恵まれた環境にいる。

そんな中で学校図書館の持つ役割はいったい何だろうか。インターネットという便利で集積的なメディアにはない特質が、現在の学校図書館にあるだろうか。

「回転本屋さん」という企画を通じて再発見したのは「知のビジュアル化」という効果である。本校図書館ですら1万冊以上の蔵書を持ち、今回選んだ200冊という書籍の数は、その中のほんの一部である。我々人類が蓄積してきた「知のアーカイブ」はあまりにも膨大で、実はインターネット上でもカバーしきれないほどの広がりを持つ。

ところが、電子辞書やスマホはたいへんコンパクトな機器なので、その全体像がなかなかイメージしにくい。その点、200冊という書籍数と、背後の本棚を目の当たりにすることによって、生徒は「知の世界」の広がりや深みを実感できたのではないだろうか。そして「知の世界」は、本校図書館の蔵書量を易々と超えて、ほとんど無限に広がっている。メディアとしての学校図書館の役割は、まず生徒たちに、この「知の世界の広がり」を実際に可視化させることにあるのではなかろうか。

「こんな本もあるんだー」という新鮮な驚きこそが、生徒たちの好奇心を刺戟し、人類が蓄積してきた学問と文化への尊崇の念を育てる。こうして謙虚に先人の知恵に向かい合うことこそが、真理への道につながる。他のメディアにはない図書館の役割はここにある。

そのためにはまず生徒の足を図書館に向かわせなければならない。そのための工夫はいろいろあるはずだ。



(本校図書館の書架より)

何と函に入ったままである。こんな図書館はめったにないと思われるが、全集や事典の類は、そう頻繁に手に取られるものではないので、保存状態はたいへん良好である。参考までに。